

# 安芸高田神楽を担う人々 —その2— 東京で舞う神楽

神楽でまちおこしに取り組み安芸高田市。来年1月16日(土)には、第5回目を迎える「ひろしま安芸高田神楽 東京公演」があります。東京で神楽公演を行うことにより、「安芸高田市」というまちをPRし、関東圏での神楽ファンを開拓するための取組です。

今回の出演神楽団は、高宮町の羽佐竹神楽団。日々の鍛練の成果を、東京で発揮します。



広島県無形民俗文化財に指定された「羽佐竹神楽」



お祭り終了後に紹介された羽佐竹神楽団員。10代～60代までの23名が活動しています。

来年の東京公演に出演する羽佐竹神楽団。週末にあるお祭りやイベントなどで行う神楽公演をこなしながら、練習に励んでいます。団長の井上秀志さんは「東京公演は、安芸高田市という看板を持って舞う特別な公演。10年に1度あるかないかのチャンスなので、団員の士気は上がっています」と言います。

井上さんは神楽団のことを「神楽が好きが集まったボランティア集団みたいなもの」と表現しますが、神楽の伝承については「若い時は神楽が本当に好きでやっていますが、だんだんと年数を重ねるごとに、絶やしてはならない、という思いに変

わっていくのだと思います」と、神楽の伝承への思いが年齢を重ねるごとに強くなると語ります。

羽佐竹神楽団は昭和54年に「羽佐竹神楽」として県無形民俗文化財に指定。当時から舞の形を変えないように伝承することを努めています。

しかし、神楽は少しずつ変化し、30年前と比べると奏楽や舞い方は大きく変わっています。「人間が歳を取って変わることと同じように、変わらないようにと思つてやっても自然に神楽は変わります」と井上さんは言います。

神楽をする上で大切なことは、「団員の気持ちをもつにすること。羽

佐竹神楽団は神楽の公演後に反省会を行い、団員の思いを共有しています。「神楽は、舞と、楽と、裏方が一体となつて一つの神楽になる。そのためには、どういう立場であつても、お互いを理解していかなくてはならないと思います」。

羽佐竹地域では、昭和47年に羽佐竹神楽団後援会を結成。結成以降、後援会が神楽団の大きな支えになっています。「しっかりと活動をしていただいでいて、神楽団の力になっています。感謝しています」。地域に支えられている羽佐竹神楽団。地域と共に、羽佐竹の伝統を守り続けます。



9/22日(火・祝)羽佐竹八幡神社で舞われた奉納神楽。写真の演目は、東京公演でも上演される「八岐大蛇」。

舞と、楽と、裏方が  
一体となって  
一つの神楽になります



羽佐竹神楽団 団長  
井上秀志さん (64歳)

# 安芸高田神楽を担う人々 —その3— 神楽で地域が輝くまちづくり

安芸高田市内 22 神楽団による年間 150 日間にわたる神楽定期公演のほか、「神楽グランプリ」などの神楽競演大会を開催し、神楽の魅力を発信し続けている神楽門前湯治村。平成10年の開村以降、神楽ブームの火付け役として、また神楽団員の憧れの舞台として、安芸高田神楽の隆盛を担っています。



毎年11月に神楽ドームで行われる神楽グランプリ。各地の競演大会で優勝した団体が出演し、新舞・旧舞部門に分かれ技を競う最高峰の舞台。



賑わいを見せる神楽門前湯治村。神楽公演を見に、年間10万人以上の人々が湯治村を訪れています。

地域の人が輝くまちに、  
人は惹かれます



株式会社神楽門前湯治村 代表取締役社長  
溝本郁夫さん (60歳)

昭和55年に旧美土里町役場に入庁後、構想の当初から神楽門前湯治村(以下、湯治村)のプロジェクトに携わり、平成10年の開村から代表取締役社長を務めている溝本郁夫さん。当初は、当時の美土里町長の「美土里のシンボルである神楽の殿堂を作りたい」という思いから構想が練られました。現在湯治村の取締役を務める人々と湯治村の原型となる案を検討し、「神楽を見て食事や温泉も楽しむことができる拠点」の建設へと計画が変更になりました。

当初は、「毎週神楽をやつて、本当に人が来るのか」という意見もありましたが、開村初年度には毎週平均600人のお客さんが来村。そのことが、神楽団と住民の自信につながった、と溝本さんは言います。「美土里町は、住民が美土里町の魅力を明快に答えられないまちでした。神楽専用の施設がある湯治村ができて、神楽と言ったところにも負けない、言えるようになったことが、財産だと思っています」。

溝本さんが仕事をする上で最も大切にしていることは、「神楽団員がやりがいを持って神楽をする環境を作る」こと。神楽団員の多くは、仕事や地域での役割を持ちながら、週に1〜3回の練習を行い、週末には神楽公演をこなしています。「やりがいのある神楽にしていきたいと、神楽の伝統は続いていきます。家族との時間を犠牲にして神楽に打ち込む人を支えていくことが私の仕事です」と言います。

また、溝本さんは「神楽」に惹かれることだけで人が来るのではなく、神楽でまちを盛り立てようとする「人」のパワーに惹かれて人が集まる、と言います。「湯治村の従業員はもちろんですが、神楽大会にボランティアで参加しているスタッフ、バザーを運営する地域の女性会、体験工房運営の皆さんも、みんな一生懸命です。神楽以上に、地域の人が輝いて、盛り上げようとしている。そんなまちに、人は惹かれてやってくる。神楽を盛り上げることで神楽の伝統を守り、またそこに集まる人の力が、外部から人を呼び寄せる」。神楽に関わる多くの人たちの力が、安芸高田市の活力となつています。